慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青池先生の想い出
Sub Title	
Author	李, 津娥(Lee, Jinah)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.19- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青池先生の想い出

李　津娥

今から 30 年前の 1992 年の秋に、三田キャンパスの研究室棟の 2 階の研究室で青池先生に初めてお会いした。あまりにも緊張していたので、先生がどのようなお話をされていたか、自分が何をお話していたかは、まったく覚えていない。しかし、その日、先生の後ろにぼんやりと見えていた書架の本、研究室の窓から見えていた木々、そして先生がとても優しく温かく迎えてくださり、安堵したことは今でもよく覚えている。

その年の秋学期に大学院の研究生として在籍し、その後、社会学研究科博士課程に進み、単位取得後も博士学位論文執筆のため研究生として在籍していたので、7 年間、青池先生に大学院生としてご指導いただいた。その間、大学院の受業だけでなく、先生の学部ゼミにも 7 年間、出させていただいた。そのため、慶應は大学院の時から在籍していたが、メディアコムのゼミ生たちに、私のほうが「慶應度」が高い、という話をすることがある。大学院の授業はもちろんだが、先生の学部ゼミに参加できたことは、その後の私自身の研究、教員としての学生の指導にも大きく影響していると感じている。

その後、東京女子大学での 20 年間の在職を経て、慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所に着任した。先生は、すでに北海道の札幌にいらっしゃったので、すぐにはお会いできず、まずはお手紙でご報告した。その後、電話でお話した時に、先生はとても喜んでくださった。落ち着きましたら、札幌にお伺いします、とお約束したが、果たせない約束となってしまった。

「あの頃の三田社会学」の企画を聞いた時に、学会での最初の口頭発表が三田社会学会だったことを思い出した。大学院生の時に、先生に勧めていただき、当時、博士課程で研究していた広告の効果に関する論文を発表した。とても暑い 7 月の土曜日で、暑さと緊張で汗だくになったことを覚えている。これまでの学会発表の中で最も緊張した発表だった。三田社会学会にはその後も何回か参加したが、発表はしていないので、三田社会学会で発言の機会をいただいたのは「あの頃の三田社会学」が 2 回目となった。先生のご研究と個人的な想い出をお話したいと思い、慶應での社会心理学の教育研究に関する先生の論文と、先生のご専門であるイノベーション普及学と私の研究との関連性についてお話をさせていただいた。

本企画を聞いた時に、『三田社会学』に掲載された「慶應義塾 150 年記念講演会（慶應義塾の社会学--回顧と展望）慶應義塾の社会心理学」（2009 年, No.14）という先生の論文を思い出した。2008 年、創立 150 周年を迎え、それを記念し、三田社会学会で開催された講演会を論文としてまとめられたものである。あいにく講演会に参加することはできなかったが、論文を拝読し、慶應で学んだ社会心理学の研究者たちの一人として自分の名前も載せていただき、大変嬉しく思った記憶がある。社会心理学については、「社会心理学（social psychology）は、社会的存在としての人間の心理過程や行動が社会的要因によってどのように、そしてどのような影響を受けているかを明らかにする科学である」と定義され、多岐に渡る社会心理学の研究領域に関して紹介されている。慶應の学部と大学院の社会心理学の研究と教育の歴史についても解説されている。着任時から、日吉で「社会心理学」の授業を担当しており、慶應で行われてきた社会心理学と関連する教育の歴史は大変興味深いものである。慶應において社会心理学という科目は、記録としては 1950 年代の後半に設置されたのが最初で、大学

李津娥「青池先生の想い出」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）19-20 頁

院社会学研究科においても同じ時期に開設されていた。慶應において社会心理学の科目名での教育は、60 年以上の歴史があるということになる。また、ご執筆の時点で、慶應の学部や大学院で学び、社会心理学の教育研究に従事してきた研究者たちについても紹介されている。慶應での社会心理学の教育研究を理解していただく上で大変貴重な論文であり、ぜひご一読いただきたい。

先生のご専門であるイノベーション普及学は、先生の研究室に所属する前から勉強する機会があった。私は学部と大学院修士課程を、慶應とも交流の多い韓国の延世大学で学んだ。当時の教員には、アメリカで留学された方が多く、ロージャズの名著『イノベーション普及学』（Everett M. Rogers, *Diffusion of Innovations*）は、著者に師事された教員の授業で勉強する機会があった。当時、韓国語の翻訳はなく、悪戦苦闘しながら分厚い原著で勉強していた。その後、慶應でも先生の学部ゼミに出させていただき、先生が監訳されたロージャズの『イノベーション普及学』で勉強した。青池ゼミでのイノベーション普及学に関する学びは、まさに青池研究室の学部生と大学院生の「集合的記憶」になっていると言える。私としては、すでに原著で学んでいたこともあり、私なりに理解をしていたつもりであった。しかし、それは大間違いであった。ゼミで活発に交わされた議論、先生の鋭いご指摘から、イノベーション普及学や社会心理学の概念に関する私の理解がいかに浅かったのかを痛感した。研究者になってからは、先生が慶應を退職された後、学部創設時から教育にご尽力され、在職された成城大学の社会イノベーション学部で「イノベーション普及学」という授業を 1 年間担当する機会があった。授業では、先生のご著書『イノベーション普及過程論』をテキストとして使い、イノベーション普及学について深く学び直す貴重な機会となった。

私が韓国で一緒に学んだ大学院生たちの間では、批判的メディア研究や理論が流行っていた。そのような視点から研究していた大学院生たちが学問としての意義を見出だせない広告と消費者心理を研究テーマとしていた私としては、肩身の狭い思いをしていた時期があった。また、広告研究は、マーケティングの分野からアプローチされることが多く、社会心理学的な視点から研究を行っている広告研究者としてのアイデンティティという点からも思い悩んだ時期があった。そんな私に、青池先生は、広告や消費者心理の研究は、多岐に渡るイノベーション普及学の研究領域の中でも重要な位置を占めており、社会心理学的視点からのアプローチの重要性を力説され、励ましてくださり、頑張ることができた。

大雪となった札幌の告別式に集まった青池ゼミの OBOG の中には、初めてお会いした方も多かった。しかし、学部や大学院のゼミ、ゼミに所属していた時期、といった違いにも関わらず、青池ゼミの共通の言語でお話している感覚があった。久しぶりに、ゼミでイノベーション普及学やコミュニケーション学を学び、三田のキャンパスや軽井沢での春合宿で勉強していたあの頃に戻ったような気がした。その時、私たちは、まさに「私たちの先生」という気持ちを共有していたと思う。誰かがふっと口にした「青池先生に怒られるよ」という言葉に、先生の厳しい教えとともに、いつも気にかけてくださり、優しく温かく接してくださったことをとても懐かしく思い出した。先生にはこれからも先生の下で学んだ私たちをつなげてくださり、温かく見守ってくださることを念じている。

（いー　じーな　慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所）